

## 【第91回生涯教育講座】

## 骨粗鬆症治療 Update

すぎもととしつぐ  
杉 本 利 嗣

キーワード：骨粗鬆症，骨質，脆弱性骨折，骨血管連関，QOL

## はじめに

骨粗鬆症治療の最終目標は脆弱性骨折とこれに伴う quality of life (QOL) 低下の防止である。脆弱性骨折の多くは骨粗鬆症の診断基準を満たさない骨量減少レベルに発生していることが明らかとなり，早期からの治療介入の必要性が提言されている。現在，骨折防止効果が証明された骨粗鬆症治療薬の登場により，日常診療においても evidence-based medicine (EBM) の実践が可能となっている。一方，続発性骨粗鬆症をきたしやすく，かつ頻度の高い内科的疾患の適切な診断とその管理も重要な課題である。また，近年骨・血管・脂肪連関，すなわち骨粗鬆症と動脈硬化／血管石灰化さらには脂質異常症に密接な連関が存在することが注目されてきている。さらに脂質異常症，高血圧などの生活習慣病の治療薬と骨粗鬆症治療薬がそれぞれ骨代謝と動脈硬化／脂質代謝に影響を及ぼす可能性も明らかとなってきている。このように骨粗鬆症と併存しやすい生活習慣病にも配慮し，EBMに加え，tailor made medicine を実践していく必要がある。本稿では骨粗鬆症治

療の Update について概説する。

## I. 骨折リスクの臨床的評価

1980年代後半からの骨塩定量装置の急速な進歩と普及により，骨密度を指標とした骨粗鬆症の診断基準が策定された。しかしその後，脆弱性既存骨折の存在は骨密度と独立した骨折危険因子であること，さらに骨吸収抑制剤の骨折防止効果に占める骨密度の寄与率はせいぜい20%であることが示された。これらの結果の蓄積とともに，2000年代に入り骨密度以外の骨強度規定因子として骨質が注目されるようになった。そして骨質関連因子として骨構造（形態と微細構造），骨代謝回転，骨石灰化度やミネラル結晶の性状，マイクロダメージ，コラーゲン架橋の性状等が挙げられている<sup>1)</sup>。これに伴い骨質評価法に関する研究も急速に進歩してきているが，現在一般臨床で評価可能な骨強度規定因子は骨密度と骨代謝マーカー測定による骨代謝回転のみである。

## 1. 骨密度

骨密度が ISD 低下すると骨折リスクが約2倍高まることが知られている。

そして大腿骨頸部骨折例の検討などより，特に測定部位の骨折リスクの評価に骨密度測定が

Toshitsugu SUGIMOTO

島根大学医学部内科学講座内科学第一  
連絡先：〒693-8501 出雲市塩冶町89-1